



No.88 December 2021

福島第一原発事故が 山村の山菜やきのこの利用に与えた影響

原発事故による天然の 山菜やきのこの利用変化

2011年3月の福島第一原発事故により、東日本の広範囲に放射性物質が放出されました。放射能汚染の影響は長期にわたり、地域差も大きく、特に広大な山林では、居住地や農地の周辺を除くと効果に対するコストや環境負荷の面から除染が進まなかったこともあり、原発事故は農山村の暮らしに今なお大きな影響を与えています。とりわけ、天然の山菜やきのこのなどは食を通した内部被ばくに関わるため、東日本の広範囲で出荷の停止や自粛が続いています(図1)。

山菜やきのこの採取や溪流釣りが原発事故の

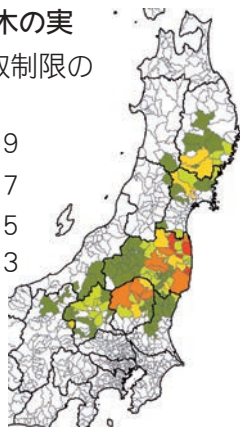
前(2000年代後半)と後(2015年)でどのように変わったかについて、福島第一原発からの距離や放射能汚染状況の異なる福島県内の2つの山村地域で全戸アンケートを実施したところ、いずれの地域でもこれらの活動は事故後に減り、とくに原発に近い地域で急減していました(図2)。事故前によくみられた採取物のお裾分けも、事故後には両地域ともに急減し、贈答を介した人間関係も大きく失われたようです。なお、福島県の特用林産に関する統計資料から、天然の山菜やきのこの生産量の長期変化を見ると、1970年代以降、年変動があるものの大きく減っていました。これには一部品目の栽培化や輸入増、食生活の変化、植生変化

など、さまざまな要因が関わっていましたが、そこに原発事故の影響が加わったと考えられます。

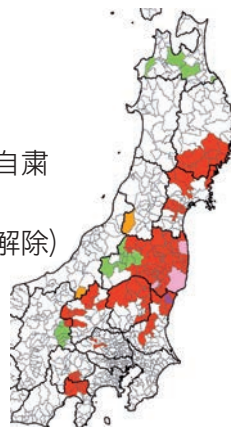
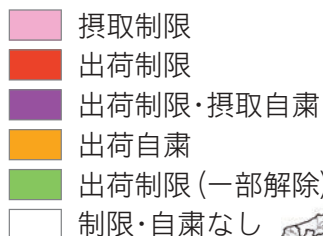
図1 天然の山菜、木の実、きのこの出荷制限や自粛の状況(事故10年後の2021年6月現在。出典：松浦、2021)

(a) 山菜・木の実

出荷・摂取制限の
品目数



(b) 野生きのこ



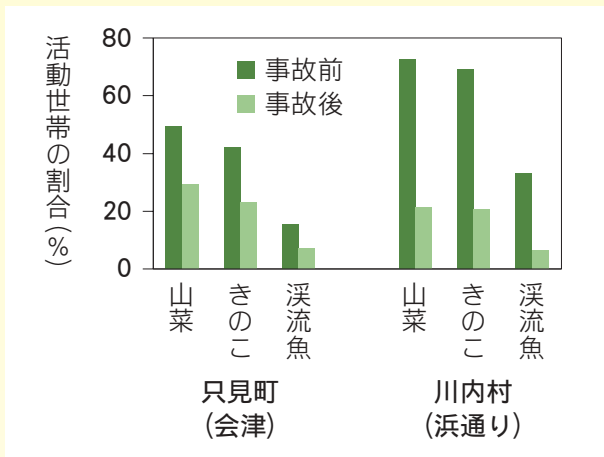


図2 事故前(2008~2010年)と事故後(2015年)における各活動を行う世帯の割合(%)の変化 (出典：松浦、2021)

外部被ばくからみた山菜やきのこ採取の再開可能性

採取などで野山に入る際に、空間線量率の高い地域では、まず外部被ばくに気をつける必要があります。そこで、将来、空間線量率が低下していくなかで、放射能汚染で野山に入りにくくなった地域にいつ頃から再び安全に入っていけるようになるかを予測しました。

まず、事故前に山菜やきのこをよく採っていた方々に、個別対面型アンケートで主な採取品目ごとのかつての採取場所の地理的特徴(植生、地形、道

からの距離など)を聞き取り、地理情報システム(GIS)を用いて採取地の分布を推定しました。その結果、山菜やきのこの品目ごとに採取地の分布は大きく異なり、空間線量率の高い場所にも低い場所にもかつての採取地が見られました(図3)。

次に、2050年までの空間線量率の変化を予測し、かつての採取地のうち、採取に出かける頻度を変えた場合に、国の基準値(1mSv/年)未満の外部被ばくに収まる範囲がどのように拡大していくか予測しました。その結果、採取に出かける頻度や時間を減らし、高線量の場所を避ければ、より早期に野山に安全に入っていける可能性があることがわかりました。なお、本稿では触れませんが、放射性セシウムを集めやすい一部の山菜やきのこについて、摂取の量や頻度を減らすなど、食を通した内部被ばくにも気を付けることで、より安全性を高められると考えられます。

本文で紹介した研究成果の一部は、下記文献に掲載されています。

松浦俊也(2021) 原発事故が農山村の自然資源利用に与えた影響. 山林1649号 24-31頁

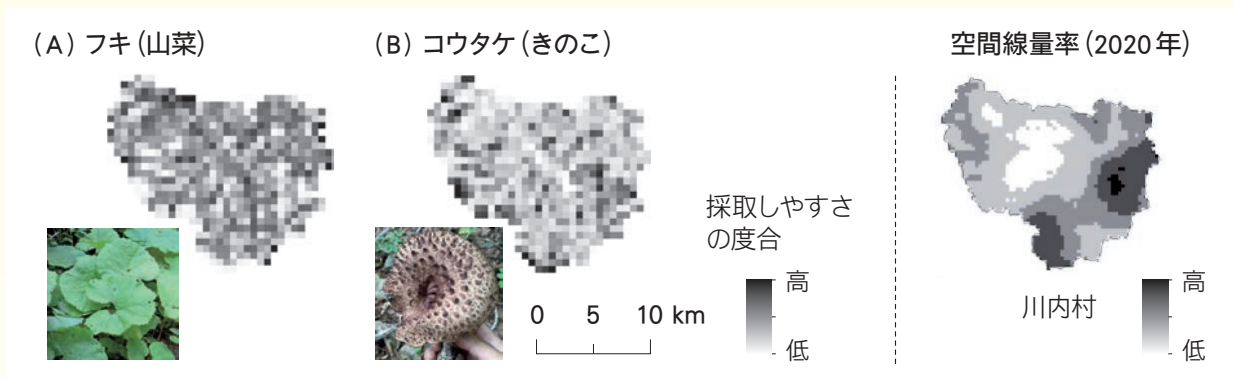


図3 原発事故前の山菜やきのこの採取適地の分布推定図と空間線量率。(A) フキは谷や道沿いの草地や林縁、(B) コウタケは日当たりの良い斜面上部の落葉広葉樹林で道から離れたところでよく採られていました。(出典：松浦、2021)

●森林資源管理研究グループ 松浦 俊也

リサイクル適性(A)

この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。

R60
古紙パルプ配合率60%再生紙を使用

VEGETABLE OIL INK

Forest Winds No.88

令和3年12月15日発行

国立研究開発法人 森林研究・整備機構

森林総合研究所 東北支所

〒020-0123 岩手県盛岡市下厨川字鍋屋敷92-25

Tel.019(641)2150(代)

Fax.019(641)6747

ホームページ <https://www.ffpri.affrc.go.jp/thk/>